

氏名(本籍地)	中本 かほる (福岡県)		
学位の種類	博士(教育学)		
報告・学位記番号	甲第427号(甲(教)第8号)		
学位記授与の日付	平成30年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第1項該当		
学位論文題目	YWCAによる女子青年教育の研究 —1920～30年代の東京YWCAの事業を中心に—		
論文審査委員	主査 教授	博士(人文科学)	矢口悦子
	副査 教授		緒方登士雄
	副査 准教授	博士(教育学)	須田将司
	副査 教授	博士(文学)	大豆生田稔

【論文審査】

本論文は日本における社会教育関係団体の一つであるYWCA (Young Women's Christian Association: キリスト教女子青年会)が、どのように組織され、戦前期の女子青年教育の担い手としていかなる事業を展開していたかを解明しようとした社会教育史研究である。

YWCAはキリスト教に基づく宗教団体として広く知られているが、社会教育関係団体としての教育事業や社会事業の詳細については、十分な解明がなされていない。キリスト教系学校の歴史研究や、セツルメント等の社会事業研究、さらに婦人矯風会を中心とした婦人運動研究、少年少女文化表象研究等の深まりと広がり比べ、女子青年教育という視点からの研究は立ち遅れている。また、青少年教育研究という領域に限定してみても、青年団及び女子青年団研究、キリスト教系青少年教育団体であるYMCAやボーイスカウト・ガールガイド研究に比べて、YWCA研究は後塵を拝してきた。本研究は、そうした先行研究の実情を背景に取り組みられた本格的な戦前期女子青年教育研究である。

本論文において中本氏は、世界YWCAの誕生から1900年代初頭における日本YWCAの設立を述べたのち、同団体による女子青年教育事業の特色が顕著に顕われている1920～30年代における活動について、東京YWCAの機関誌や事務局保存文書などの第一次資料を発掘し、国民精神総動員体制下での事業停止までを詳述することによって、女子青年教育研究に新たな頁を加え、これまでの研究の深化を促す視点を提示している。

構成は、先行研究と研究目的、方法を記述した序章、第1章～第7章、終章、引用・参

考文献、さらに、中本氏作成による女子青年教育関連年表、東京 YWCA 機関誌『地の塩』記事一覧、東京 YWCA 幹事一覧、東京 YWCA 職員・講師一覧、日本 YWCA 修養会一覧をまとめた巻末資料からなり、本文179頁（原稿用紙537枚分）、巻末資料66頁（原稿用紙260枚分以上）となっている。

以下では、各章についての概要を述べつつ審査内容を報告する。

序章においては先行研究が整理され、戦前期女子青年教育研究の対象としては処女会・青年団が圧倒的であること、女性史研究においては戦争とジェンダー研究領域で YWCA への言及があること、そして復刻された各種雑誌に基づく書誌研究が近年始まっていることなどが述べられるが、女子青年教育機関としての YWCA に関する研究は未だ少数であることが明らかにされ、本論文の研究目的及び方法が示されている。研究方法としては、日本における YWCA 運動の中心に位置づく東京 YWCA による機関誌『地の塩』（全113号、前半は各号タブロイド判8面、後半は30～50頁の冊子体）と同団体の事務局に保管されていた各種記録を整理し、それらを基本資料として分析、考察を行うと述べられている。なお、同機関誌は、本研究での利用を一つの契機として、2014年に復刻出版されており、今まさに新たな研究が生まれ始めている。

第1章では、欧米における YWCA 誕生の経緯が、キリスト教リバイバル運動という文脈の中で語られ、19世紀後半に働く若い女性や女子学生の支援等を通じて、社会改良の担い手として自律性を持った女性たちが運動を起こし、拡張してきたことが示される。定説として支持されている論文や著作を用いた手堅い記述である。

第2章では、日本における YWCA がどのような人々によって設立されたのかが明らかにされる。欧米からアジアの女性たちに対する布教のために来日した宣教師たちによって、当時既に女学校が多数設立されていた。次なるターゲットとして「過酷な労働を強いられている紡績、製糸工場の『女工』のために働く」宣教師の日本への派遣要請が世界 YWCA に対してなされていた記録も残されており、ミッションスクールにおける女子教育とともに、働く女子青年の労働状況の改善に向けた本格的な事業を展開するために日本 YWCA が設立された経緯が示されている。ミッション系女学校の校長等と共に設立にかかわった日本の女性たちの中には、河井道子や津田梅子など欧米への留学経験者が含まれていたこと、さらに側面から援助した政財界の人々が多数存在したことも実名を挙げて明らかにされている。

第3章から第6章までは、YWCA 運動において最大の事業規模を誇り、そのリーダーが日本 YWCA の幹部を兼ねていた東京 YWCA による各種事業の展開及びその社会的背景の分析、女子青年に対する教育活動の実態が細かに描き出されている。特に、第1次世界大戦後の不況や農村の疲弊、労働争議が激化する社会状況のもと、女工たちや困窮地区の少女とその母親たちを対象に展開された社会隣保事業の一つとして、旧小石川区白山御殿

町棟割長屋で実施された「私共の家」事業が詳述される。その担い手となった幹事と呼ばれる事務局員たちの経歴や果たした役割も追究されている。先行研究の全くなかった事業の実態が、そこに集う少女、女工、女学生や母親たちの書き残した感想や、事業を推進した幹事による事業報告などから丹念に拾い上げられ再構成されることで、陰り行く時代の空気をも忘れさせるような喜びと驚きに満ちた学びの姿が描き出されている。

第7章では、当時130万人以上の会員を抱えていた女子青年教育の大本山ともいえる処女会・女子青年団による修養会とYWCAによる修養事業の比較考察が試みられた。戦前期の女子青年たちにどのような教育が実施されていたかという教育史的な関心を引き寄せる内容となっており、理想とされる女性像や労働婦人像、社会的役割への期待など両団体の違いが示されるとともに、女子青年たちが志向する自立や学習活動における共通性という点でこれまで指摘されることのなかった新たな発見があった。

終章では結論としてこれまで述べてきたことから導き出されるYWCAによる女子青年教育の特徴が整理され、より精緻にそのリベラルな特徴をも含んで捉え返すことによって、自立と自律への志向性を持った女子青年の姿が見えてくることが明らかにされた。今後の課題として、特に戦時中の教化団体化の中でYWCAがどのようにその精神を戦後へと継承したのか、女子青年たち自身はYWCAでの学びを戦後新教育の時代にどのように生かしたのか、究明する必要があると結ばれている。

以上、本論文の構成に沿ってその内容を見てきた。以下では、審査委員会及び公聴会で出された意見を踏まえ、本論文全体の特長を示し、残されている課題について述べる。

本論文の第1の特長は、日本YWCAの設立後ほどなく独立した「ローカル組織」としての東京YWCAの事業の詳細を、機関誌『地の塩』と同団体が保存していた事務局文書等を丹念に読み込むことで描き出した点である。必要事項を抽出し、その記載事項を複数の団体史や当時の各種文書、関連領域における先行研究によって裏付け、分析の基礎となる資料群を構成する作業にかけた地道な努力が実を結び、東京YWCAによる女子青年教育の実証的な記述に成功している。

第2に本論文の独自性が高く評価されるのは、東京YWCAが旧小石川区白山御殿町で実施した社会事業の一形態である「私共の家」事業の発掘とその記述である。白山御殿町は徳川綱吉の館林城主時代の別邸があったことから「徳川公の御殿跡」と呼ばれた地域であり、小石川養生所のあった場所でもあったが、旧武家屋敷の宅地化により人口が急増した。1930年当時、近隣には最も近い東洋大学をはじめとし、東京帝国大学等の教育機関も多く存在し、印刷、製本、医療機器等の工場が密集する地区となっていた。その一角にはいわゆる細民地区を抱えていた。東京YWCAは地域調査の後、同地区における奉仕活動を開始し、長屋を借りて「私共の家」と名付けた拠点を設置して事業を多面的に展開し

た。15歳から19歳の女工たちのクラブ活動を定期的に実施、夏には保田海岸での海水浴旅行、さらには幼児から尋常小学校や高等科に通う女子児童・生徒を対象とした活動として、帝国大学の小石川植物園を利用した夏の林間学校を実施し、多い年には1,800名もの参加を得ている。「私共の家」が関東大震災後に急速に発展しているセツルメント事業の一翼を担い、大正リベラリズムの空気がいまだ残る時代から、昭和恐慌の打撃、戦時動員と目まぐるしく移り行く時代に、女子青年や少女たちとその母親のための活動を展開していた様子が細かく描き出され、国民精神総動員体制において活動停止に至るまで記述されている。これは、新しい研究成果であり、女性史や社会教育史にとどまらず、宗教団体による社会事業と戦時体制に関わる研究においても今後参照されうる内容となっている。

第3の特長としては、YWCA が組織運営から事業展開のすべてを自力で完遂するために、幹事の養成に力をいれ、運動の担い手を自ら育てたことと、事業提供においても自立を目指す労働女子青年を対象とした各種事業を実施してきたことを明らかにした点である。幹事の養成においては、ミッション系の高等教育機関との連携や米国への留学などが実施されていた。提供する事業に参加した女子労働者たちにとって理想の将来像は、農山漁村に生きる黙々と労働する母のイメージとは異なるものであり、欧米から来日した幹事の持つ自活した女性像に近づくことであった。嬉々として職業技術を高め、仲間とクラブ活動にいそむ働く女子青年像が描きだされている。

最後に第4として、1920～30年代という時期に大都市東京で展開された女子青年教育を、全国的な巨大組織であった処女会及び女子青年団の活動と比較考察することで、両者の決定的な違いを描くとともに、修養事業における共通性が多数見いだされるという指摘がなされており、この点は社会教育史に新たな解釈をもたらすものとして評価される。国策に動員された青年団員として一言で括ってしまうと見えなくなる姿、つまりYWCAの女子青年たちと変わらない、仲間と楽しみながら学習活動が続ける若い娘たちの姿が鮮明に浮かびあがってくるのである。指導者の言葉に従い、男子青年団の後ろでその補助的な役割を担うだけの存在としてではなく、宗教や経済的な背景の違いを超えて時に関わりながら、積極的に自立を目指す女子青年群像が丁寧に描き直される必要がある。すなわち、女子青年教育研究における新たな視点の提示である。

以上のように評価される論文であるが、本論文を起点としてさらに研究を深めるべきテーマも多数確認された。例えば、類似の起源をもつYMCAとの比較研究や、他の宗教団体による社会教育事業との比較、全国組織としての青年団との比較のみではなく、各地域における女子青年団の教育活動との具体的な比較検討、学校教育制度におけるキリスト教関係女子教育機関を含めてみた場合のキリスト教宣教師の役割の検討も必要である。本論文では表に記載するに留められているが、後の東京女子大学長となる安井てつ（東京女子高等師範学校卒）や、津田塾大学長となる星野あい（女子英学塾出身、プリンマー大学理

学部留学) など、女子高等教育の展開とYWCA運動との深い結びつきが読み取れる。また、同運動を支えたメンバーには、開設式に庭を提供した大隈重信を始め、各界のリーダー層と内外のキリスト教界からの後押しがあったことも固有名詞の列挙から推測されるが、列挙された人物とYWCAとの具体的ななかかわりについてはまだまだ未知の部分が多く残されている。

さらに、近現代経済史研究や社会事業史研究の著しい進展の中で見るYWCAによる隣保事業の位置、そして戦後初期の占領軍による新教育啓蒙期に通訳等の役割を果たした戦前期YWCA活動経験者と、新教育運動にかかわった女子青年団員との関係やその後の婦人運動への関わりなど、重要なテーマが今後取り組むべき課題として残されている。

【審査結果】

以上述べてきたように、本論文はYWCAに関わる資料の発掘とそれを用いた実証的な研究により、日本における女子青年教育研究に新たな頁を書き加えるとともに、今後、本論文に連なる多面的な研究の進展を予想させるという点で、社会教育史研究の領域にとどまらない研究の継承・発展が期待される、いわば起爆剤となりうる論文であると評価される。また、文学研究科教育学専攻の博士学位論文審査基準に照らしても、妥当な研究内容であると認められる。したがって、所定の試験結果と論文評価により、本審査委員会は全員一致をもって中本かほる氏の博士学位請求論文は、本学博士学位を授与するにふさわしいものと判断する。